

た。博士の學問がこのような形にのびたことは、まことに尊い。

概論というものは、たいへんな曲者である。たとえ同一テーマを扱つても、必ずしも同一な結論にはならない。そこに史學本然の面目がある。誰が書いても同じに見えるのは、教科書とその参考書だけである。それにも拘わらず「概説を書く」のを輕蔑する人がある。

この聲は、史學の面目を知らず、概説はハサミとノリとで作るものと思ひこんでいるからである。他人のアイデア、また苦心して立論した成果を無斷で借用して平氣でいる人も、このであいて、理論の眞價がわからないからである。小さな問題をコソコソと解いているだけが、東洋史學徒の使命ではあるまい。技術だけでは専門家として不適格であらう。特殊は、常に全体の上のせて考えるべきであり、問題には、ただ形の上の解決だけでなく、必ずその意義づけが要求されるからである。公式主義の理論のからまわりが血にも肉にもならないと同様に、誰でも書ける概説や誰が書いても同じな概論などは、印刷用紙の無駄である。どんな小さな分野でも、常に廣い視野のもとに研究している人には、いつかは人を肯かせる理論ができ、そういう人が書いた概論こそ、どんな専門家が讀んでも啓發されるところが少なくないであらう。羽田博士の概論は、まさにそれである。ことに、博士は中國の周邊に明るい人で、中國史(シナ史)にもはつきりした見透しをもつていた人である。シナ史萬能の考えで東洋史を扱う時代が、とうに過ぎ去つてゐる今日、博士が残された綜論類のもつ役割は、意外にも大きいのではあるまいか。

なお、本書の論文配列は、どういう意圖で行われたのか、私にはさつぱりわからない。この點は下巻の上梓をまつて、よく考えてみたいと思つてゐる。

(松田 壽男)

古代殷帝國

貝塚茂樹 編

昭和三十二年十二月 貝塚茂樹 編
B6 三七六頁 文獻目録 一四頁
寫眞 三三頁

一九五五年に董作賓は『甲骨學五十年』を書き、胡厚宣は『殷墟發掘』を書いて半世紀にわたる殷墟研究のあとを回顧している。そしてこのたび『甲骨學と殷墟發掘の概説』であるこの書が、貝塚茂樹編、大島利一、伊藤道治、内藤戊申、白川靜、樋口隆康の五氏の共同述作として『それぞれ得意の部門について、年來の蘊蓄を傾けて現れたのであつた。そしてこの書は昨年末以來、すでに貪慾なこの國の讀書界に、あまねく好評をもつて迎えられ、書林はほぼその目的を達成したようである。だから本書について語ることは、いささか今さらめくことのように思われる。しかもこれは嚴密な意味での學術書ではない。人類の文明と歴史のシリーズという企劃の一環のものなのである。それゆえ著者たちが豫想される讀者の説得のために、自在に空想をめぐらし、或は奔放に筆を走らせていることのあることも、この書の目的と性質からはむしろ當然のことのように思われる。ただ一二の點ではその空想は餘りに飛躍しすぎたこともあるようだ。

けれど私どもにとつて興味があるのは、大部分の著者が貝塚氏を中心とする甲骨學のグループの人々だということである。私どもにとつては全く難解のものでしかない甲骨文字を、自在に解讀し、驅使しているこの人々が、こぞつて著者となつたという例はまだない

ようである。だからそうしたグループの人々のもつ方法論、いえは甲骨文研究者の發想法、そして結論を得るまでの論理の進め方、そんなものが案外はつきりとこの書のなかには出てきているようにである。そうしたことにについても以下二三記してみることとしよう。

さてⅠ、龍骨の秘密、大島利一氏。それは甲骨の發見にはじまり、王國維の『殷周制度論』に終る初期の研究史である。文は明快で美しい。『古文字、古器物の學と經史の學は表裏をなす』と史料を評價した一九二七年迄の甲骨文字に對する雰囲気のみごとに書き出されている。そうした評價の態度と雰囲気から、殷周の全面的革命という王國維の結論が出てきたのである。殷周制度論の弱點は、そうしたなかにその根をひそめていたのであつた。とはいへ評者にとつては、王國維の考えはまだ捨てざるべきでないいくつかの暗示をひそめているように思えるのだ。

Ⅱ、地上と地下と、伊藤道治氏。まず一九二八年以後の殷虛の發掘史。そして王墓の構造から、死者のこと、守護神のこと、等々、さまざまな面にわたる精神文化を説いた章である。發掘によつて得られた現象に對する巧みな解釋が連續する。それとともにここで著者をとらえているのは、農業社會におけるアニミズムを基調とした精神生活のようである。しかしこれらの描寫や結論が出てくる資料は、やはり卜辭が中心なのである。ところが卜辭は、それ自身すべて殷の支配層にいた人々が超自然的なものに適應した形式のいろんな型を示しているものなのである。そして卜辭は問いと答えから成りたつたのだから、卜辭そのものは人格神を對象としているわけである。だから卜辭からはしぜんアニミズムの解釋しか出てこないものである。積極的な適應形式の面しか出ないわけである。それゆえ今

ひとつの消極的な適應の姿についても、もう一步進んで解釋を試みてみる必要があるのではないだろうか。含貝やその他の墓葬形式にみられるこれらの原始的な宇宙觀が、卜辭の論理とどのように對應するものが問題であらう。死者の墓はそれぞれがひとつのミクロコスモスであつたのだから。地下に營まれた壯大な大墓は實に大地母神への回歸であり、すべての儀禮は新しい生命のために復活の力を與えるためのものである。死後の永生のものというべきではあるまい。そうしたミクロコスモスの設定に至る心性の追求がさらに深くなざるべきだらう。それはこれらの生業と社會の性格の反映でもあらうから。

Ⅲ、殷人の日日、内藤戊申氏。ここでは殷の日常生活が描かれる。胡厚宣をはじめとする諸種の研究を引用して、殷代にいた或いはあつたらしいとされる動物相、産業としての農業、曆法、音楽等々の實際生活におけるさまざまな面が記されている。そして氣候の問題についてもいろいろの議論がある。しかし評者にとつてすこしふしぎなのは、降水量とか、氣温とか、風向とかいう氣象要素と氣候とが混同されたまま議論が進んでいるように思えることである。歴史という人文の動因となる氣候は、あらゆる生物の榮養手段である植物相や動物相を通じて現れることによつてはじめて意味があるのだし、また一方では生物相はそれ自らの適應と變異という掟がりをもつものだから、一二の氣象要素をいきなり生物相に結びつけることができにくいことは、自明の理だと思われるのだが、むかしリエシアン、フェーブルが注意したような、降雨が多いと人口も多いというような奇妙な因果律がうつかりすると出てきそうな氣がするのである。たとえば雨ひとつだつて、生物にとつて重要なのは、

絶對量よりもむしろその全量が一年に配分される型なのである。だから一七五頁の胡厚宣の降雨表でも、そういう型としてみれば開封の降雨日數の型と別に異つていない。氣候という抽象語で論ずるよりも、生物相や景觀の變遷をもつと正確に、具体的に捕える努力の方が現段階では大切のように思われる。氣候という綜合概念はそれ以後のものであらう。

それから誰しもとりあげる干支のこと。人名にある十干の字は生れた日であると解くのはずい分無造作な考えだと思ふ。この一般化している考えは、たしか白虎通や皇雨謚がその根據となるものだが、これは原始の人々が人間の名というものをどんなに重んじていたか——を無視しているのである。名は人そのものであり、またその人の負う種族の全歴史を同時に表現するものだつたのである。今日の私どものもつてゐる姓名に對する感覺でもそれに近いではないか。

そう考へてゆけばこれは氏族標章としか考へられない。最初の殷は十個の氏族から成り立つていたのではないか。それは背後に十個の太陽の傳説につながる太陽神的な神話的存在をもつていたのである。それが伊藤氏のいう連合体國家の實態だつた。そして十二支は何人も認める殷文明の二元性のいまひとつのグループに屬するものだらう。詳しいことをここで論じる場合ではないけれども、十、十二を單に聖數とするのみではなく、それが聖數として意識されるようになった基礎まで入りこむ要があらう。原始の數は決してアブリアリなものではなく、いつも具體的な存在の反映なのであるから。

IV、卜辭の世界、白川靜氏。『甲骨金文學論叢』によつて常に新しい見解を提示される氏の擔當だけに、なかなか私どもにとつては目新しい見解が現れてくる。氏が用いる方法は偶然Ⅲで説明されてい

る。即ちめばしい文字を片ばしからカードにとつて字引をこさへ、それで用例を求めて解釋してゆく——それがいわゆる歸納であることは誰でもすぐ察せられるし、それは資料に接したとき史學者のとする常道である。董作賓の記念すべき貞人の發見もこうして生れたのであらう。しかし數學的な歸納と異つて、偶然に残つて發見された資料からの歸納の結果は、大体において確率曲線に従つて眞に近づくやうである。評者は以前に居延の漢簡についてこのことを考へてみたことがある。甲骨についても事情は同じである。そこに歸納の限界があり、同時に歸納以外に新しい理論と演繹の参加がしぜん要請されることになる。どうせ不足勝ちの資料である。とすると案外ほんとの肉付の役をしているのは後者ということが多いものだ。

さて、この章では殷の社會の姿が中心テーマとして扱われている。骨卜から龜卜へ。そして出土甲骨の戰火による受難。それらのなかから董作賓によつて刊行された資料『小屯』。董作賓にはじまる甲骨文の研究史、日本の貝塚氏をはじめとする諸家の貢獻、そして卜辭を中心として殷の神聖王朝の構造が説かれる。『卜辭は神聖な王者の現實支配の重要な形式であつた』。それから王朝の支配構造、祭祀を主とする史系、軍事を擔當する師系を中心とする政治組織、そしてそれらのすべての關係は氏族的な原則に貫かれてゐると説かれている。そして殷の祖を夷系と見、周以後にも亡國の民の文化の傳承が、中國古典のなかに散見することが明かにされる。行論は整然として餘地なしという感じがする。

しかしやはり問題は残りそうである。氏族社會という構想が立てられ、類別稱呼という氏族制度のなかに現れる一特質が巧みに利用されているにもかかわらず、一般の氏族社會にみられるそのほかの

特質はあまり利用されてはいないようである。

フラトリイ、モイエティに當る族名は何なのだろうか。多子がモイエティであるならば、當然その對應に母系のモイエティとして多婦を考えてよいはずである。そして鄭、雀などはフラトリイとして整理してゆくこともできはしまいか。そしていわゆる兄弟相續の型から、それに先行する部族の構造を推定することも可能ではないだろうか。いかにして歸納を超えるか、それが次の問題である。

それから誰でも目をつける奴隸の問題。白川氏は奴隸の存在について否定的である。尤も各章の著者もこれについては必ずしも一致した見解を示していない。しかし現在主張されている奴隸制説が、すべて思想的な要請からアブリオリに出てきたものとも思えない。まず例の股墓でみられる大量の身首を異にした死体は、確に人身供犠である。死後に奉仕させるものではなく、死者に生命力を附與する考である。だからそれは生産奴隸ではない。生産奴隸を殺すのは不經濟だからこそ、異族を捕えてきて犠牲に用いるのであろう。また氏のように職能氏族の存在を想定し、その標章として圖象文字を考えると、職能氏族の前提である職能神の記述がト辭にも銘文にも知られていないために、職能神の行方が不明になつてしまう。だからここでは職能氏族とするよりも、圖象文字は生産奴隸をそれぞれ統率するいろんな職能神のマークであり、それによつて祭器の永遠性が確保され、或は祭らるべき先王の靈との結合を容易にさせたと考えた方がおだやかではないか。亞字形の使用も、聖職者というよりむしろ神性のマークとみられはしまいか。それが職能氏族として人格化するのには西周期に至つてからであらう。そして日本風の職能氏族を考えることは環境條件からいつてすこしむりと思われる。

さらに股の度々の外征はやはり奴隸狩ではないか。游牧の民は好戰的、農業の民は温順とみて他の種族を奴隸化する傾向は少いとみるのは、すこし素朴な考え方の方である。股そのものが植民國家として出發しており、その最初にすでに先住族の奴隸化はありえたわけである。しかもそうした發生期の奴隸は一代奴隸であつた。奴隸の再生産は不可能であつた。そこに新しい資源を求めて奴隸狩が繰返されたのであろう。

しかも股は内陸國家であつた。曾て股の都市國家説が説かれたけれども、それはこの條件が見落されたための誤りであらう。この内陸國家は原始的な農業經濟体の上に布置された、軍事的支配點によつて成立する。王のしばしばの田獵は、そうした支配點の結合のために必要であつた。そうした經濟体はやがて、人口の増加と奴隸資源の減少によつて、奴隸という労働力の再生産による生産増加を求めねばならなくなる。ここに一代奴隸は世襲奴隸となり、奴隸人口は増加しはじめ、それは相對的に彼等の地位を上昇させるようになる。そのような時期になつてはじめて彼等の存在が聖なるト辭の上に現れるようになる、即ちようやくにして一個の人格に近づきはじめたのだから。一般にト辭の上に奴隸らしきものが現れぬというのもふしぎではない、彼等はもともと無人格者であつたのだから。こんなプロセスは別にアブリオリなものなしで考えられそうである。

V、股人の故郷、樋口隆康氏。この章では主として解放以後の中國の考古學界を、最も新しい知見によつて詳しく述べられている。まことに解放後の中國の考古學界の活動はめざましいものがある。そのうち特に大切なのは安陽の股虚以外の、それより先行すると思われる股の文明が檢出されたことである。

ことに鄭州におけるそれは重大な意味をもっている。龍山文化と接觸し、『大墓の出現、銅器の存在』という不連續面が現れたことは、まさしく殷文明の一側面を照し出したということができよう。青銅文化の殷は、龍山における限り連續的な發展の系列に入るのではなくて、不連續な植民文化の形を示しているのである。そうして『忽然として出現した』その文化の源流はやはりまだ地下深くひそんでいるのである。

さてこうしてこの『古代殷帝國』を通觀してるとき、何としても惜しまれるのは、中國史、否世界史を通じての、この古代文化の位置を解明した章を缺くことである。専門家はいざ知らず、この構成のままでは殷なる壮大な古代帝國が突如として現れ、またそのまま消え去つていったという印象を讀者は受けとりそうである。殷のあとを受けた周、そして春秋戰國、秦漢そして現代中國にまで中原に國家は興亡したのである。そうした歴史の流れのなかでの殷の古代帝國としての位置づけはどんなであるか—この點にスポットをあてた章がぜひとも望まれるところであつた。

さらに殷の文明以前、彩陶、黑陶等の先史文化圏との連關についても、今日ではまだ確たる説がない現況ではあるけれども、もうすこし筆がのばされてもよかつたであらう。また殷文明の二元性は誰しも氣づくところではあるが、その二元性をつくる要素についても、さらに突込んだ敘述が試みられてもよかつたのではないか。特にトウテツ文によつて代表される奇怪な殷の銅器の相貌は、誰しも深く印象に残るところである。それら銅器群、青銅器の實相についてもやや物足りないのである。

以上三七二頁にわたるこの書について、二三のはんの思いつきに

すぎないような意見を附加しながら、書きつづつてきた。しかし評者は強いて異をたてようと試みたのでは毛頭ない。なぜならば、この書は、卜占に用いられた甲骨文の解讀という座標系を中心として描かれた古代殷帝國の像なのである。ひとつの實在を描く座標系は、決して唯一無二ということではできない。青銅器や陶器のような物質文化を座標系として描く方法もあらうし、經濟理論にもとづく座標系もありうるわけである。そして人がどんな座標系をとりあげるかということとは、その人の好みであり主觀的判斷によるものである。しかし同時にそれぞれの座標系は適當な變換によつて、他の座標系に移され得るものであることも必要である。それら各座標系によつて作られる古代殷帝國の像が、もつとその數を増し、そしてそれらをつなぐ適當な變換式を見出すことが、今後の古代史研究の課題なのであらう。そうした意味でも甲骨學を中心としたこの書が、ひとつの概説書としてまず現れたことを喜び、貝塚氏ほかの著者の方々のたいへんな努力に對して、深い敬意を表したいと思う。

(吉田光邦)

齊民要術上

西代山 幸雄 一 訳

昭和三十二年十一月三十日

東京大學出版會

A5版 三五二頁

齊民要術は周知の如く南北朝の後魏の頃、詳しく言えば、西紀五三〇—五五〇年の二〇年の間に、高陽の太守を経た賈思勰によつて